九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

トーマス・マンの日本人宛て五書簡

小黒, 康正
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1912771

出版情報：文學研究. 115, pp.127-143, 2018-03-09. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

トーマス・マンの日本人宛て五書簡

小黒康正訳

一　平田次三郎[1]宛て（一九四九年一月二日）

日本　東京都杉並区……
平田次三郎様

一九四九年一月二日

一五五〇　サン・レモ・ドライヴ
パシフィック・パリセーズ、カリフォルニア
トーマス・マン

親愛なる平田様

ご推察いただきましたとおり、私宛に送られ、雑誌『近代文学』四月号にて公開された、感動にあふれ、感動をもたらし続ける立派な手紙を、私は当時まだ目にしておらず、耳にしてもおりませんでした。[2] あなたのご好意によっ

て私のために訳出されたドイツ語を通じて今では手紙の中身が私の知るところとなりましたので、私が一読しこれほどまで感動し心を揺さぶられたことは滅多になかったとあなたにお伝えできるのです。それは痛みであり咎めであり悔いである言葉を一読してのことで、そのお言葉はあなたがお国の罪と災難を言い表そうとしてお使いになったものであり、赦しと表明と執りなしを微かな声で願う試みが入り混じっている言葉でありました。

お気持ちは分りすぎるぐらいよく分っております。私はドイツが深く転落する当時に似たような発言をしましたし、[3] 私の言葉は亡命ドイツ人によっても国内にいたドイツ人自身によってもたびたび反感をもって受け入れられました。つまり、私の出自とする国の者たちがあなたの言われる罪と悔いの感情に満たされるなどと言ってしまうのは、かなりの見当違いであります。犯した罪業をあまりの誇張だと言う傾向と並んで反抗心と独善性が支配的になっておりますし、いやそれどころか、ナチズムの企てが実に恐ろしい結果を迎えてたった三年しか経っていないにもかかわらず、この悪行を生み出した精神状況への復帰が見まがうべくもありません。しかもドイツは、大概の民族が（本質的にドイツの罪によって）困窮疲弊しているときに、すべての民族をさしおいて自分が助けられなければならないという確信を露骨に示したのです。ドイツはキリスト教国ですが、日本はそうではありません。しかし、謙虚と懺悔というキリスト教的な要請が私の古い故国よりも日本においてかなりよく満たされているという有様にすっかりなっているのです。

そのようなわけで私はお手紙を感動のみならず、ドイツ人としてある種のお恥ずかしい思いで拝読いたしました。仰ることはごもっともで、日本に降りかかった運命はドイツのそれととても似ておりますし、いくつか相違があると付言されましたこともごもっともです。この相違の本質は、私の考えによりますと、（自国に対する連帯責任感を抱いているドイツ人の考えかもしれませんが）罪の程度にあります。日本はヨーロッパのファシズム諸国と同盟を結んで帝国主義戦争を行い、そして敗戦しました。日本がとった行動はかつて多くの国々がとった行動と同じで

すし、今日なおヨーロッパの小国が再び取っている行動、つまり、西ヨーロッパ復興計画の枠内でアメリカから得ている武器と資金を用いて海外の国民から独立を奪い資源を支配するために行っている戦争[4]と何ら変わりがありません。帝国主義は決して新しいものではありませんでしたし、日本がそれによって難破した後でも、世界から無くなっておりません。まったくもって無くなっていないのです。日本は若い世代の多くからも弾劾された弾劾に値する戦争を行いましたし、日本が行った戦争はまさに他の戦争と同じものであり、詰まる所、残忍であり、人間性を繰り返し損ねるものでした。このことに対して日本はいま償いを行っており、戦争指導者たちが先ごろ絞首刑によって償いをしました[5]。それはちょうどドイツの戦争犯罪者が絞首刑による償いをしたのと何ら変わりがありません[6]が、償いをしたのはその一部であって、全員が償ったとはとうてい言えず、もしかしますと最も罪の重い者たちこそ絞首刑から逃れているのかもしれません。しかしながら、日本はまだ若い文明国であり、つい八十年前までは卑しい相手をあっさり斬捨御免にすることが帯刀の武士に許されていたにもかかわらず、ナチスドイツとは異なり、非人間性と道徳に反する卑劣な行為からなる哲学を持ち出しませんでした。それは、全国民に害をもたらし、人びとの法感覚を損ね、こうした哲学の名と精神のもとで行われた数多くの残虐行為に対して国民を無感覚にした哲学だったのです。日本は帝国主義的戦争をすることで「近代的に」なりアップ・ツー・デートになっていると思い込んでいたにすぎず、原始状態への逆戻りを崇拝したり、原理的に理性よりも本能を、法よりも無法を崇めたりすることはありませんでした。全体主義国家としてのかつての振る舞いは（それはそうとイタリアの場合と似ていますが）国民の魂の奥底までには達せず、その人間性なり道徳的な健全さなりはかなり無傷のまま残ったのです。私はこのことに関してドイツ向け放送を通じて同国人たちに示した一事例を少々あげてみたいと思います。

三年前にアメリカの偉大なる大統領フランクリン・ルーズベルトが亡くなったとき、聞くところによれば、大日本帝国の総理大臣が故人を偉大な指導者と呼び、アメリカの国民に向けて国としてお悔やみの言葉を述べたとのことです。「なんと驚くべきことではありませんか」と当時の私はドイツに向けて叫びました。[7]「私どもにとりましても驚くべきことです。諸君にとりましては理解できないに違いありません。日本は野心的な封建君主の一団によって唆されて、アメリカと生死をかけた戦時下にあるのです。しかし、こうした階層による疑いようのないおぞましい支配が道徳的な混乱と麻痺をもたらし、ナチズムが私たちの哀れなドイツでやってのけたのと同じように、国を零落させたなどと言ってしまうのであれば、それはかなりの見当違いであります。かなた東洋にある国では、騎士道や人間的振る舞いに対する感覚が、死と偉大に対する畏敬の念がいまだあるのです。これが違いであります。日本の上層にあったものは、たしかに危険をはらみ災いに満ちてはいましたが、しかしそれは上層の一つだったのです。ドイツでは十二年前に最下層にあったもの、人間的に最も劣り低いものが上がってきて、目下のところ国の相貌を決めてしまっています。」

以上が当時の私の言葉でした。私があげる違いは今日でもあります。それであなたがご自身の感動的な文章の中で罪の意識と自己嫌悪をある種爆発させたことを誇張と感じる私の思いを、分っていただけることでしょう。「正義が私たちを打ちのめした」とのことですが、それは日本の立場からすると正しいのです。もっとも勝者からしますとそれほど正しくはありません。正義が用いる手段は正義そのものではなく、正義と同一視したところでせいぜいのところ独りよがりなものだからです。私が日本宛の新春挨拶で昨年書いたことにあえて注意を促しておきます。[8]「一般的に申しますと、敗戦は勝者が忘れがちなある種の利点を結果として伴うのです。と言いますのも、勝利という前提から自分に非の打ちが無かったと結論づけ、さらに自分の側では万事が順調であるとも結論を出すことは勝者にすれば当然のことですが、他方で、敗北によってもたらされる戦意の緩和が自身に立ち戻って厳しく良

心を問いただす機会を与え、先入見にとらわれない新生への意志を作り出すからであります。」そこで私はこう付け加えました。「（私の信じて疑わぬことですが）日本が自らの災厄から何にもまして学んだことがあります。それは、今日どの賢明な国民でも知っていることですが、戦争は忌まわしい時代錯誤になってしまい、今日の人類にかせられている課題を何ひとつとして解決できないということです。[9]」

戦争が時代遅れで忌まわしいものだという以上の理解は消極的なものでしかないように思えますが、肯定的で積極的なものへと容易に転化され得るものであります。転化されますと、この理解は最上の価値としての平和への信念となり、平和の名のもとで果たされるべき課題への信念となるのです。課題とは、つまり、現実と真理との間、この世で社会的・政治的・経済的になお敢えて現実と呼ばれているものと知の精神が前々から新しい必然・神の御心・真理として認めてきたものとの間、これらの間で口を開いた深淵に橋を架けて補うという課題であります。こうした補いが必然であり、この作業が義務だとする信念があるかぎり、あなたが公開状でかなり気を使って用いられている言葉を使いますならば、ニヒリストになることはありません。ニヒリズムとはすべての価値に対する絶望を意味します。それに私の知るところでは、今日、ニヒリズムへの誘惑は大きいものなのです。しかし、平和への義務と平和に庇護されて果たされる義務や課題を信ずる者、つまり、人間の運命を切実な問題とする者は、ニヒリストではありません。

人間の運命。これが問題となること、つまり、全体的なものが問題となることは、普遍的意識の問題です。私たちの時代が生み出す優れた文学も、文化批判や歴史哲学も、その根が個人や国民や個々の問題や窮乏にあるのではありません。問題の所在は、人間そのものにあり、人間の秘密にあり、人間の去来にあり、万象における人間の立ち位置にあり、動物的自然の一部でありながら、それでいて精神と結びつき、精神に誓いを立てた者である人間の微妙な存在にあるのです。人間の問いが、人間の総体性をまとった人道的問題が、何らかの責任意識をもつ者たち

それぞれの眼前で求められていることは、差し迫った危機にさらされている今日ほど、おそらく無かったのかもしれません。その際、私たちが体験から教わるところによれば、人間的なものは、常に全体として、どんな段階や時期においても、それだけにいわば時代を超越して、この世に存在します。つまり、歴史的進歩の理念を修正してしまう認識があるのです。それは、絶えず何もかもが同時にあり、最も古く、原初的で、低級で、文化的な意味合いでは無気味なものが最も進歩前進したものと並んで（時代に反するという意味ではなく、時代を超えて常にあるという意味での時代錯誤的に）あり続け、更にそうした無気味なものが古い力を用いて、どうも頻繁にありがちなのですが、啓蒙的理性、知の精神よりも出来事を決定的に定めてしまうという認識であります。

このように全てのものが並存することは、おそらく現代の最も特徴的な経験でありましょう。それは、人間的なものとその未来とに対する私たちの関係に、疑念と闇雲な自尊心とからなる独特な混合色をもたらすものなのです。ある種の事柄を人類は克服しているという楽観的な進歩思想の妄想は、まさに妄想として認識されています。人類は何も克服していません。私たちの眼前で、最も低級で原始的なものである本能が、残虐と盲目の権力欲と蒙昧な迷信が、血の饗宴を祝いましたし、自己批判の片鱗も示さないまま、この上ない愚かさを発揮し続けているのです。成熟した人間精神の責務、それは、このような原始と進歩との同時出現を前にして尻込みをするのではなく、それとの対峙である種の哲学的な厳しさを学びとり、それでいて人間精神の自然な優しさも善に対する人間精神の誇りや愛や意志も何ら失わないことにこそあります。

精神的で善なるものは盲目的な本能とともに、自由は利害とともに、純粋な意志は暗い衝動とともに存在するのです。正義ならびに知恵と救いを得ようとする時代の精神的努力は、時代の求めに応じています。みずからの力量と才能に応じて各人がそうした努力に関わることは、必ずや私たちをニヒリズムから守るのです。日本の若い方々にすれば、国が誤って戦争を遂行するにしても、自分たちの正義に対してであれ、地上がもっと明るくまともにな

るように自分たちが一役買う力に対してであれ、絶望する理由など断じてありません。私は日本の若い方々に勇気と明朗と信頼を望みます。

トーマス・マン

パシフィック・パリセーズ、カリフォルニア
一九四八年十二月二十八日[10]

二　高橋義孝[11]宛て（一九四九年二月九日）

東京都豊島区……
高橋義孝様

一九四九年二月九日

一五五〇　サン・レモ・ドライヴ
パシフィック・パリセーズ、カリフォルニア
トーマス・マン

拝啓　高橋教授殿

『掟』[12]に関するラジオ講演のドイツ語訳を私にお送りくださったお心遣い、恐悦至極に存じます。私はご高訳を

満悦して拝読し、私の作品中にあるフモールへの言及に格別の喜びを抱きました。フモールは私の文学作品における一側面ですが、あいにくこちらの国[13]ですと私の著作はあまりにも哲学的かつ思想的要素ばかりだと見なされることが多く、フモールの側面が認められないことが多いだけに、ご指摘は嬉しく存じます。ハンス・E・プリングスハイム[14]を通じまして日本における拙著の反響を伺っており、そのことが私を十分に満足させているのです。重ね重ね感謝申し上げます。

敬具

トーマス・マン

三　高橋義孝宛て（一九四九年二月十七日）

東京都豊島区……

高橋義孝様

一九四九年二月十七日

一五五〇　サン・レモ・ドライヴ

パシフィック・パリセーズ、カリフォルニア

トーマス・マン

拝啓　高橋殿

一月二十三日のお手紙にまだ返信していないことに、ちょうど今、気づきました。ともに全くご指摘のとおりです。「kraft」の語頭は小文字で、「Ihrer」の語頭は大文字で書かれていなければなりません。このような誤植を正すのに日本の碩学に登場していただければならなかったとは、本当にお恥ずかしい次第です。

本日は用件のみにて失礼いたします。

敬具

トーマス・マン

追伸

平田氏宛ての手紙が貴殿のお手元に届いたと伺い、嬉しく存じます。つきましては、日本語訳がすべての必要条件を満たすものと、私は確信する次第です。

『掟』についてのラジオ講演に対する私の感謝状を、この間、お受け取りになられたものと拝察いたします。

四　高橋義孝宛て（一九五一年四月十二日）

東京都豊島区……

高橋義孝様

拝啓　高橋殿

四月四日のお手紙落掌、ヨセフ物語日本語版へのご関心に感謝しております。この作品が紛れもなく私の愛好者

がおられる日本において一般の方々の身近なものになれるのでしたら、それはまた喜ばしい限りです。

印税六パーセントへの引き下げ必要性の件、お書きになられていることは納得がいくことですが、問題をここで決めることが自分にできるとは思っておりません。私は何ぶん出版業の事に何ら通じておりませんし、日本における私の利害関係の事は代理人のハンス・エーリク・プリングスハイムにきっぱりと委ねてしまったからです。しかしながら、同氏に別便の手紙を書き、案件をもう一度熟慮するように依頼しますが、決定は同氏に委ねます。

新潮社との合意が成立しますならば、幸いです。重ね重ね感謝申し上げます。

敬具

トーマス・マン

五　高橋義孝宛て（一九五四年五月十七日）

一九五四年五月十七日

チューリヒ湖畔キルヒベルク

アルテ・ラントシュトラーセ三十九番地

トーマス・マン

拝啓　教授殿

私が書いた二本のフロイト論[15]に関する緻密で的確なご高説に、深謝を申し上げなければなりません。これらの論

攷では何が精神的に有用で、何が欠けて矛盾しているのかを、私はよく承知しております。なにぶん事情はこうで、「口を開けばすぐに迷い始める」（ゲーテ）[17]ものなのです。

フロイトは最初の論攷にあまり満足しておりませんでした。やはりあれでは自分のことよりもロマン主義を扱う試論ではないか、と言っていたのです。しかしながら、祝辞である第二の論攷の方はことのほかお気に入りでした。彼は病気が重いということもあり式典[18]に列席できませんでしたが、しかし翌日にお宅でお茶会があり、そこでの席上、私は内輪での朗読としてもう一度全文を読み上げたのです。フロイトの喜びようには、こころ打たれるものがありました。

ユングは一度も読んだことがありません。[19]もっとも、フロイトについても、彼のことを知るだいぶ前から影響を受けておりました。私はヨゼフ小説を通じてとっくに親しんでいた神話的図式という考えをイマーゴ誌[20]に掲載された論文「古い伝記の心理学について」から取り上げましたが、この論文の著者はフロイトと一緒にロンドンに亡命した弟子だったのです。名前を挙げるべきだったとは思いますが、残念ながら忘れてしまいました。重ね重ね御礼を申し上げます。

敬具

トーマス・マン

訳者注

（1）平田次三郎（一九一七～一九八五年）は、福島県生まれの評論家、ドイツ文学者。東京帝国大学文学部独文科卒業後、明治大学講師などを経て、中央大学教授になるが、在職中に死去する。一九四七年から雑誌『近代文学』の同人ならびに編集者として活躍した。

（2）平田次三郎「トーマス・マンへの手紙」、『近代文学』一九四八年四月号（近代文学社、一九四八年四月一日発行、四二～四八頁）所収。平田は、一九四八年二月二十日付けのマン宛の手紙によれば、終戦を迎えた「あの酷暑の日」まで「絶望が唯一の現実」であり、マンに手紙を送るなど「夢のような」ことと思っていた。加えて、一九四六年一月に邦訳がでた講演『来るべきデモクラシーの勝利』（一九三八年）を読んだところ、「わたくしの心身に悔恨の刻印」が深く彫りつけられ、「われわれは、今後人類の一員として、世界の人々と共に、何ごとかを為すことが宥されるたらうか？」という問いに対して「到底、宥されるものではない」という自覚をもったのである。しかし、平田は、多くの青年が「ニヒリズムの克服の道を求めて彷徨」する状況を目の当たりにして、「わたくしどもへの心強い呼びかけ」を「遥か海を距てた荒廃の地」から敢えてマンに縷々嘆願するに至った。以上の公開書簡に応えたのが、ここに訳出したマンの手紙である。なお、「ヨーロッパへの窓」という特集が組まれた同号には、マン宛ての手紙の他に、野間宏「ジイドへの手紙」と荒正人「ブランデンへの手紙」が掲載された。

（3）一九四四年から一九四五年にかけてドイツ国内外の強制収容所がアメリカ軍、イギリス軍、ソ連赤軍によって次々に解放される中、ドイツ軍代表は一九四五年五月八日にフランスのランスで降伏文書に調印をした。「似たような発言」とは、トーマス・マンが同日カリフォルニアのサンタ・モニカからラジオを通じてドイツ国民に向けて送ったメッセージのことを指す。『収容所』と表された文章には、以下のような文章がある。

「我らの恥辱」ということです、ドイツの読者聴衆よ！と云いますのも、ドイツに関わるものは何であれ、ドイツ的に話されたものも、ドイツ的に書かれたものも、ドイツ語で生きてきたものも、すべてこの不名誉な恥さらしに当てはまるからです。（Vgl. Thomas Mann: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt a. M. 1960/1974. Band XII, S. 951.）

（4）第二次世界大戦後、独立を宣言したインドネシアと、同国を再植民地化しようとしたオランダの間で一九四五年から一九四九年までの間に生じた戦争。マンの憤りは一九四八年十二月二十二日ならびに二十三日付けの日記にも記されている。Vgl. Thomas Mann: Tagebücher 1946-1948. Hrsg. von Inge Jens. Frankfurt a. M. 1989, S. 343.

（5）極東国際軍事裁判（東京裁判）の判決により、一九四八年十二月二十三日に東条英機や広田弘毅ら七名の絞首刑が執行された。

（6）ニュルンベルク裁判の判決により、一九四六年十月十六日にゲーリングやローゼンンベルクら十二名の絞首刑が執

行されていた。

（7）以下の文章は、一九四三年に刊行された『ドイツの皆さん！』Deutsche Hörer! に収録された一九四五年四月十九日放送分の一部。同書は、一九四〇年十月からドイツ降伏直前の一九四五年五月十日までの間、マンがＢＢＣを通じてドイツ向けに行った放送原稿集である。Thomas Mann: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt a. M. 1960/1974. Band XI, S. 1120 f.

（8）一九四八年一月一日付け朝日新聞に掲載された記事。Vgl. Thomas Mann: Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Band. 19.2. Hrsg. von Herbert Lehnert. Frankfurt a. M. 2009, S. 351 f.

（9）Ebd., S. 352.

（10）手紙の冒頭にある「一九四九年一月二日」はタイプ原稿の日付けであり、最後にある「一九四八年十二月二十八日」は手書き原稿の日付けである。マンは、一九四八年十二月二十六日付けの日記によれば、以上の返信を不承不承執筆した。Ebd., S. 345.

（11）高橋義孝（一九一三〜一九九五年）は、東京神田生まれのドイツ文学者、評論家。東大独文科卒。東京の旧制府立高等学校教授、陸軍科学学校教授、北海道大学助教授を経て、一九五〇年七月に九州大学法文学部に助教授として着任した。一九五四年に教授に昇進した高橋は『文学研究の諸問題』（一九五八年）や『近代芸術観の成立』（一九六五年）を上梓するほか、ゲーテ、トーマス・マン、フロイトを中心に数多くの翻訳を手がける。また高橋は一九五五年に『森鷗外』で読売文学賞を受賞、一九六四年に大相撲横綱審議委員会委員（一九八一年に委員長）に推挙され、さらに随筆家としても名を馳せる中、一九七〇年三月に名古屋大学に転任した。

（12）一九四四年に発表されたマンのモーゼ小説。

（13）マンは亡命先として一九三八年にアメリカ合衆国に移住し、一九五二年まで住んだ。

（14）ハンス・エーリク・プリングスハイム（一九一五〜一九九五年）はマンの夫人であるカーチャの甥。カーチャは双子として生まれており、その兄弟であるクラウス・プリングスハイム（一八八三〜一九七二年）の長男としてハンス・エーリクは生まれ、日本でジャーナリストや映画評論家として活躍した。

（15）『近代精神史におけるフロイトの位置』（一九二九年）と『フロイトと未来』（一九三六年）の二論文。

（16）高橋義孝「トーマス・マンのフロイト論（その一）」（九州文学会『文学研究』、第四十一号、一九五一年三月、二一

〜三四頁）と同「トーマス・マンのフロイト論（承前）」（九州文学会『文学研究』、第四十二号、一九五一年十一月、二六〜四一頁）参照。

（17）ゲーテ『エピグラム風』Epigrammatisch 所収の二行詩「発言、抗言」Spruch, Widerspruch の二行目。Johann Wolfgang Goethe: Gedichte 1800-1832. Hrsg. von Karl Eibl. Frankfurt a. M.: Bibliothek deutscher Klassiker 34, S. 420.

（18）一九三六年五月八日にウィーンで行われたフロイト生誕八十周年記念式典。

（19）マンは『フロイトと未来』で既にユングの言葉を引用している。池田紘一「「術」と「分析」 ―トーマス・マンのヨゼフ小説とユング心理学との「偶然の一致」の意味」（日本独文学会『ドイツ文学』第七十三号、一九八四年、一〇二〜一一二頁）参照。

（20）フロイトによる編集で一九一二年から一九三七年までの間にウィーンとライプツィヒで発行された雑誌『イマーゴ。精神分析を精神科学に適用するための雑誌』。

訳者解説

ここに訳出したトーマス・マンの五書簡は、二〇一七年六月三十日付けで、高橋義孝元教授のご遺族から九州大学に寄贈されたものである。以下、寄贈の経緯を簡単に示す。

九州大学文学部の独文学研究室は、専門分野に関して全国でも有数の蔵書を誇り、（一）中世ドイツ語文献の貴重なコレクションである「雪山文庫」、（二）高橋義孝元教授の蔵書からなる「高橋文庫」、（三）旧東ドイツ文学の文献を集めた「東ドイツ文学文庫」をもつ。特にトーマス・マンやゲーテ関係の文献からなる「高橋文庫」は、池田紘一教授（当時）のご尽力によって、高橋義孝元教授のご長男である高橋鷹志氏（東京工業大学名誉教授、建築学）を寄贈者としてお招きした上で、二〇〇四年三月に開架されたものである。

更に、二〇一七年六月には、主としてマン自身の書簡と高橋義孝元教授の研究ノートからなる追加寄贈が再びご遺族からあった。関係者が協議した結果、二〇一八年三月十日に九州大学文学部会議室で九州大学大学院人文科学研究院の主催による「トーマス・マン書簡公開記念式典」を行った上で、今回の寄贈品を九州大学附属図書館の貴重図書として正式に受け入れることが決まっている。なお、同式典では、始めに久保智之研究院長の挨拶があり、その後、寄贈者の中山宗春氏（水戸済生会総合病院顧問医師）と中山周氏（高橋義孝元教授の次女）ご夫妻への感謝状贈呈を附属図書館長の宮本一夫教授が行う。また、トーマス・マン生誕の地にあるドイツ・リューベックからトーマス・マン協会のハンス・ヴィスキルヒェン会長をお招きして、記念講演をしていただくことにもなっている。

なお、今回寄贈があった五書簡の内、本訳出三番と四番の手紙を除く三書簡は、ドイツ語読本の教科書として一九六〇年に日本国内で出版された『Thomas Manns Briefe an Japaner（日本人への手紙）』（浜川祥枝編、同学社、一九六〇年、全二九頁）を通じて日本の独文学者の間では知られていたが、一九六五年にドイツで出た『トーマス・マン書簡集　一九四八～一九五五年』（Thomas Mann: Briefe 1948-1955 und Nachlass. Kempten 1965.）では一切掲載されていなかった。その後、一九八二年に刊行された『トーマス・マンの書簡集』（Die Briefe Thomas Manns. Regesten und Register. Hrsg. von Hans Bürgin u. Hans-Otto Mayer. Fünf Bände. Frankfurt a. M. 1982.）では、五書簡とも「個人蔵」として本文とともに書簡情報が記載されている。以下、簡単な解説つきで寄贈目録を記す。

寄贈目録

寄贈者　中山宗春、中山周（ちか）

寄贈日　二〇一七年六月三十日

寄贈先　九州大学附属図書館

寄贈内容（時系列順）

1. 高橋義孝氏が行ったトーマス・マンの小説『掟』（一九四四年）に関するラジオ講演の原稿（ドイツ語訳）
〔一九四八年十二月二十六日にJOAK in Tokyo にて放送〕

2. マンの手紙（本訳出一番の手紙）、平田次三郎宛、一九四九年一月二日付け、タイプ七枚（コピー）
〔雑誌「近代文学」一九四八年四月号に掲載されたマンへの公開状に対する返信。公開状は精神的混迷を抜けきれない日本に対する助言を同誌がマンに求めた内容であり、マンの返信は敗戦後のドイツと日本をめぐる内容。Vgl. Die Briefe Thomas Manns. Regesten und Register. Hrsg. von Hans Bürgin u. Hans-Otto Mayer. Band III. Die Briefe von 1944 bis 1950. Frankfurt a. M. 1982, S. 565, 48/713.〕

3. マンの手紙（本訳出二番の手紙）、高橋義孝宛、一九四九年二月九日付け、タイプ一枚
〔上記1番の講演原稿送付に対する礼状。Vgl. Die Briefe Thomas Manns. Band III. A. a. O., S. 589, 49/112.〕

4. マンの手紙（本訳出三番の手紙）、高橋義孝宛、一九四九年二月十七日付け、タイプ書きエアメール一通
〔誤植の指摘に関する礼状。Vgl. Die Briefe Thomas Manns. Band III. A. a. O., S. 593 f., 49/133〕

5. マンの手紙（本訳出四番の手紙）、高橋義孝宛、一九五一年四月十二日付け、タイプ書きエアメール一通
〔『ヨセフとその兄弟たち』の出版に関する記述。Vgl. Die Briefe Thomas Manns. Band IV. Die Briefe von 1951 bis 1955. Frankfurt a. M. 1987, S. 38, 51/176〕

6. マンの手紙（本訳出五番の手紙）、高橋義孝宛、一九五四年五月十七日付け、手書き二枚
〔フロイトやユングに関する記述。Vgl. Die Briefe Thomas Manns. Band IV. A. a. O., S. 298, 54/155.〕
7. 高橋義孝「地球の良心トーマス・マン」、朝日新聞、東京版、一九五五年八月十三日付け朝刊、五頁、切り抜き一枚（コピー）
〔トーマス・マンが逝去した翌日に朝日新聞に掲載された追悼文。一九五四年五月十七日マンの書簡に関する言及もある。〕
8. 高橋義孝「Thomas Mann の訃音に接して」、原稿用紙九枚
〔七番の手書き原稿。紙の劣化が激しい。〕
9. 右記ドイツ語原稿、六枚
〔上記八番のドイツ語訳。〕
10. 高橋義孝氏の研究ノート「トーマス・マン研究」四冊
〔一冊目にのみ多数の書き込み有り。〕
11. 「高橋義孝回顧展」葉書一枚
〔回顧展は二〇一七年六月十三日から十八日まで水戸市の「Galerie Ciel」で開催された。〕